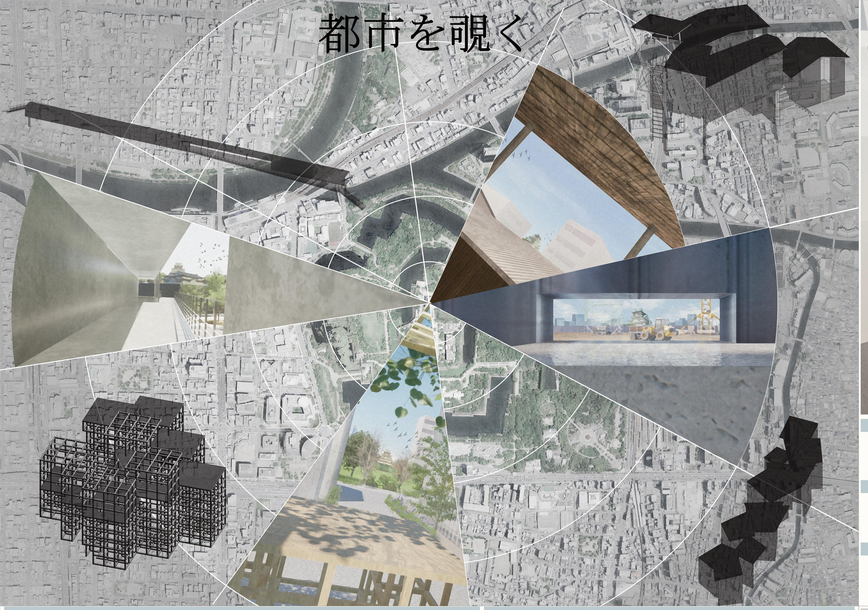
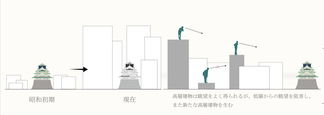
都市を覗く



01 背景

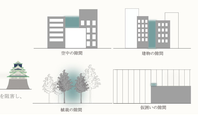
01 ランドマークへの眺望

近年、富士山への眺望権など、都市の開発によってランドマークに対する眺望が失われつつあることが問題となっている。本来のランドマークは街のシンボルであり、アイデンティティを築く目印としての建造物であるが、現状街の中に埋もれてしまっているものもある。都市の高層化はランドマークへの眺望を阻害し、ランドマークの本来の価値を失ってしまう。



02 都市の展望台

人々は、遠くへの眺望を得るために東京スカイツリーや通天閣などのタワーに登ったり、クリーマンションの上階を購入したりする。これらの景観はとから見ろすような俯瞰景であり、周囲の建物より高くある必要がある。「見る」装置としての展望台は、逆に視線を集めて「見られる」対象となり、眺望を阻害する原因となっている。



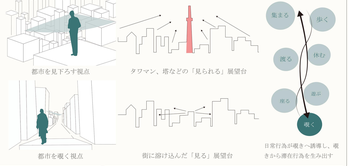
03 都市の隙間

開発によって都市化が進む中で、建物や緑被、仮説いなど、偶発的に様々な隙間が生まれる。このような隙間は逆にを眺望するポテンシャルもの景観はとから見ろすような俯瞰景であり、周囲の建物より高くある必要がある。「見る」装置としての展望台は、逆に視線を集めて「見られる」対象となり、眺望を阻害する原因となっている。

02 設計趣旨

高層化・高密度化する都市において、上から俯瞰するのではなく隙間から覗くように都市を見ではどうだろうか。隙間からの覗きは低層からの眺望を可能にし、切り取られた景観や変化する景観を体験する。

隙間からランドマークを覗く小さな展望台は従来の「見られる」展望台ではなく、街に紛れ込んだ「見る」展望台である。日常行為が覗きを誘発し、覗きが滞在を生み出すことで展望台は新たな居場所となるだろう。



03 対象敷地

都市の開発によって眺望が阻害され、ランドマークとしての機能が失われつつある場所として大阪城を敷地対象として選定する。大阪城は市により景観重要建造物に指定されており、観光資源としてでなく、まちのアイデンティティを築くシンボルとして存在している。また、周辺に景観配慮地区が指定されているが、緩い法規制などは無く、現状周辺の視点場が減少している。

本設計では、都市のランドマークである大阪城をケーススタディとして、隙間から眺望する展望台を設計する。

04 敷地調査

天守閣を眺める隙間を探すために、実地調査と理論調査を行った。調査から隙間の特徴や、隙間と天守閣の間の関係性などが場所によって様々であることが分かった。調査によって発見した隙間の中から、異なる種類の隙間４つを選定し展望台を設けた。

01 実地調査

大阪城周辺を徴新しながら歩き、フィールド調査を行った。そこで天守閣が見えるスポットを見つけマッピングした。これにより、地上または地上付近から天守閣を眺める地点を探し出す。

02 理論調査

isovist 理論を用いて、天守閣が見える場所を調査した。isovist 理論とはある点からの可視領域を定量的に評価する理論である。大阪城が見える可視面積をグラフ化しことで、地上だけでなく空中に存在する建物と建物の隙間を探し出す。

05 形態操作

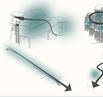
1．隙間に対して展望台を配置する

実地調査、理論調査によって発見された隙間に対して、方向と高さを考慮して展望台リアを設けた。覗きによって得る景色が、都市の新たな一面に気づかせる。

2．展望台へと誘導する動線を設ける

人々を展望台リアへと誘いわたのに動線を延長させたり、交差させたりする。日常的な動線を延長させ展望台へと繋げることで、覗きを誘発させる。

3．動線と絡みつきように機能を付加する



動線周りにボリュームや家具を配置することで、都市の居場所をつくる。覗きという非日常的行為から滞在という日常行為を生み出す。

街を覗く

01 敷地—木密地域

細く曲がりくねった道や袋小路、植栽やテラスのあふれ出し等、路地的空間が広がる地域。高層ビルに囲まれた昭和の雰囲気が残るまちである。

02 空中の隙間

isovist 理論により、木密住宅のわずかな高低差によって生まれた隙間を発見した。実地調査では見つからない空中の隙間である。

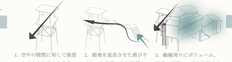
03 展望—都市との対比

開発から取り残された路地から対比的に都市空間を覗く。

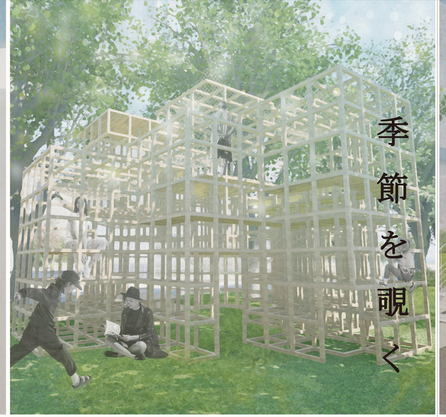
04 路地の展望台

隙間と天守閣を結ぶ延長にある空き家に、展望台とまちのたまり場となる滞在空間を設ける。路地空間から街を覗くことで、都市と路地を対比的に映し出す。

05 形態操作



季節を覗く



01 敷地—広小路公園

落葉樹、道路、常緑樹の隙間がグラデーションを広重なり合う場所で、都市公園の緑がみあふれ自然を感じる場所である。

02 植栽の隙間

実地調査と公園の植栽調査により落葉樹の隙間する隙間を発見した。木々の隙間は幽妹な隙間で季節によって大小が変化する。

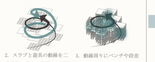
03 展望—四季を感じる

落葉樹は四季によって葉の密度を変えることで隙間の大きさを変えている。四季によって変わる景色を体験し、都市の中に存在する自然を覗く。

04 ジャングルジム展望台

天守閣と樹木の延長にある公園の空地にジャングルジム展望台を設計し、居場所を作る。植栽の隙間から覗くことで、城を覗いているようだが、実は四季の移ろいを覗いているのかもしれない。

05 形態操作



歴史を覗く

01 敷地—高麗橋通り

天満橋駅と大阪城を結ぶ通り空間で、主要な観光動線の一つである。天守閣を眺めながらアプローチできるばしょである。

02 建物の隙間

実地調査により建物の隙間から天守閣を望む隙間を発見した。建物の隙間は一続きになっており、通りからヴィスタ景観が得られる。

03 展望—歴史を知る

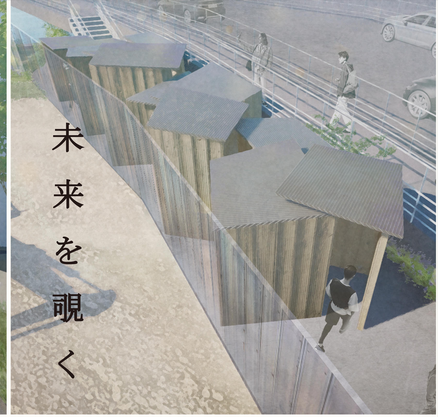
通りはかつての城があった方向に正対していたが、城の位置が変わったことで、ヴィスタ景観の軸にずれが生まれた。

04 ギャラリー展望台

通り上空に観光動線として歩道橋を移設し、城の資料を展示したギャラリー兼展望台をつくる。ギャラリーを通った後、かつての城に思いを馳せ、ほんの少し城の歴史を覗いたことになるかもしれない。

05 形態操作

未来を覗く



01 敷地—新駅開発地域

新駅建設予定地の周辺で、仮説いとレベルが一段高い道路に挟まれた開いの強い場所である。スローブがあるため、隙間の利用率が低い。

02 仮説展望台

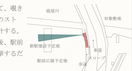
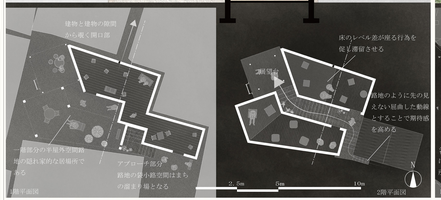
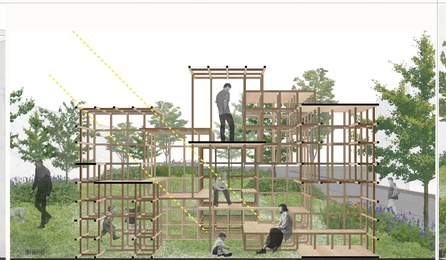
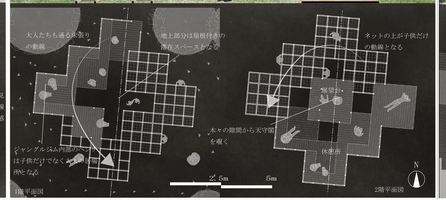
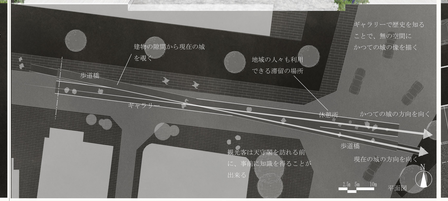
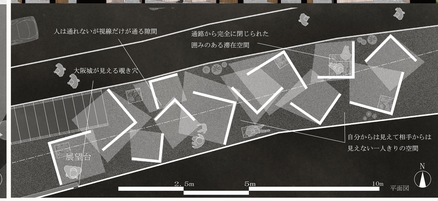
実地調査により仮説いの隙間から城を覗ける場所を発見した。奥まった所にあるため人に気付かれにくく見過ごされている。

03 展望—未来を知る

工事が進むにつれ、建物に高さが出てきて徐々に城への眺望が失われていく。覗き穴から見えなくなっていく城に向き思うのだろうか。

04 仮設展望台

利用の少ない歩道に対して、覗き穴へと誘導と滞在のためのストートトファニチャーを設計する。ファニチャーは工事終了後、駅前広場の新たな設ったと昇華するだろう。



05 形態操作